

Title	天文同好會
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1930), 10(113): 336-338
Issue Date	1930-08-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161555
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

天文同好會

本部より

今から十年前の、大正九年九月二十五日、我が同好會は創立した。詳細は「天界」第1號にある。其の後今日まで、會の發展と維持に盡した人々の努力は尊い。會の勢ひも、社會の反應も、十年前に比べて、全く別世界の觀がある。来る十月、本會は創立十週年記念會を開く。今は準備中である。會員諸君もいろいろ御意見を聞かせて頂きたい、

十週年記念集會は、多分、京都で十月十八九日頃と定まりました。全國の會員諸氏は今から繰り合はせて、是非御來會下さい。昨年花山へ來られなかつた會員諸君よ。今や「花山を見ざれば、天文を談すべからず」といふ時代になつてしまひました。——記念會としては學術講演會と、大懇親會と、天體寫眞や圖書の展覽會などが計畫され、又、觀測會も勿論計畫されてゐます。

神戸支部通信

神戸市西須磨關守畔 改發 香 埜

支部としての報告を意外に怠つて居た事をお詫びいたします。本年の一月、二月、三月と云ふ様な寒い季節の例會は出席者が意外に少なく、殊に一月は小雨、二月は曇天、三月も曇天と云ふ、辰星愛好者達にとつて何より不愉快な天候であつた事に原因したのか、淋しい寄りでありました。

一月には星のスペクトル、二月にはオリオン星座の話、三月には星圖の話、と云ふ題で中村氏が講話されました。會合する者の顔ぶれは毎回殆んど同一で熱心な研究者ばかりで、落附いて眞面目な研究が出来て却て意義であります。

四月の例會『超海王星の話。出席者十三名』も曇天であり、之れで、舊臘十二月の例會日の曇天を合はすと連続五回に涉り美しい星の姿を見得ない事になり、徒に望遠鏡が大きな圖體で脾肉の歡聲を發して居る様な始末であります。

五月の例会は半歳ぶりの好晴に恵まれ、且つ寒からず暖からず柑橘の香も清々しい好季節であつたから自ら會員外の參會者も相當にありました。此の夕は中村氏が『時の話』を講話されました。出席者十九名、十五センチと、六センチの望遠鏡で、月面、星團、其他等の觀望に歡を盡して散會したのは十一時を餘程過ぎて居ました。同夜は中村氏と私はヘルクレス星座を浮游中の 1930c 彗星の位置測定の寫眞撮影をやり、白鳥星座にある 1930 b 彗星の觀測等で竟に東天薄明になりました。

六月の例会『例会は毎月第二十曜の夕刻』は會員吉田卯一郎氏が本縣第一高女女學生を三十餘名引率して來會あり、總出席者六十五名の多數で近來にない盛會であつた。中村氏は『流星について』、吉田氏は『歐洲漫遊當時に於ける各國天文臺歴訪談』等の講話あり、折悪しく曇天の爲め實地觀測は不可能であつたから、望遠鏡の赤道儀に就て吉田氏の説明等あつて散會をしました。

六月の例会通知發送に際し會員古川庄次郎君の好意で六月中旬の天象略圖を添附しました。雜誌天界の發行が遅れたので其月の天象を知るに不便な方も多く有る事と思ひ古川君を煩した様な事です。

例会以外に、紀州の 小槇孝二郎君が二度來宅。星野寫眞を試みられた。江州の渡邊君が木星面寫生の爲めに二度も來られたが浮雲に障けられて不能に終り、住吉邊まで歸られた頃に空が晴れた等是如何にも遺憾の極みであつた。滿洲の天文老爺で通つて居る西岡永太郎大人の訪問をうけた、滿洲での活動振りのお話を聞いて 同氏の如き活動を發揮するならば同好會の會員數も現在の倍數にする事は何でもない事だと思ひ、自ら顧て慚愧に堪えませんでした。神戸 川崎造船社員の智識階級の人が三十名計り二度も見學に來られた。小學校の生徒が二百五十人、高女生徒が五十名、中學生が四十五名、何れも教師附添ひ太陽黑點の見學に來られた。

山本一清先生が二度來訪せられ、殊に 1930 d 彗星撮影で共に徹夜の上、種々有益な御指導を得た事は感謝に耐えない事です。引續いての彗星撮影で徹夜の爲め頭も少しほんやりして居るので報告は之れで擱筆。

編輯室より

近頃の編輯室は良い原稿が山積の有様で、甚だ喜ばしい。それで、とかく頁數が増す傾向があり、さうすると會計の方から御忠告を頂くといふわけで、板挟みに會つてゐる。

本號の中村氏の文は、天下一品で、只わが國內のアマチュアたちに讀んで貰ふだけでは惜しいと思ひ、全文を英譯して、歐洲の一専門雜誌に載せることにした。我國の人々の中には、同じものでも、歐文で書いてあると尊敬し、邦文で書いてあると輕る見る人がある。之れもやはり舶來品を貴ぶ惡習なので遺憾に堪えない。我が「天界」は決して普通一般の通俗雜誌でなく、中には偉大なる研究報告や、貴重なる論文が載るのですから、其のつもりで讀んで頂きたい。

前にも記した通り、今年はケプラーの三百年記念、メシエの二百年記念をやるべき年に當つてゐる。編輯室には既に、村上氏のメシエに關する一文と、竹田助教授のケプラーに關する一文とが届けられてある。年末には、又、待ちに待つたエロス星が來るので、此の珍星のために、世に率先して大切な記事を載せやうと計畫してゐる。

小楨氏の、ベルセ流星群に關する長文も亦、編輯室に來てゐる。小楨氏と其の同志の人々の業績は、全國に流星觀測の網を張つて、着々と、堅實に研究が積まれてある。

最後に、こんどの秋の同好會總會で、會費の値下げ其他が議決せられると假定すると、従つて、「天界」や「星」の編輯上にもいろいろの意見が出ることであらうと、多少の變更を餘儀なくさせられることにもなるかも知れないと思はれる。何れにしても、現代は言論の世の中である。會の運轉や、雜誌の編輯上に關して、好意ある御忠言を諸方から送つて頂きたい。

本誌の附録として試験的に發行されてゐた「星」も、こんどの總會の時に會員諸氏の御批評を仰ぎたいと思ひます。本月は休暇中のこととて同人たちの間に打ち合はせ充分ならず、「星」を休刊し、天象欄を本誌に繰り入れました。